ART 10

Taito-ku
Art Project
Archive
2008→2017

平成22年度

企画

- お囃子で生きる〜伝えたいもの、見つけたいもの
- BOYCOTT RHYTHM MACHINE VERSUS LIVE 2010
- 佐竹商店街ショートムービー制作「笑点街」
- 続・続・続・続（ゾク・ゾク・ゾク・ゾク）展（P10）

短評

3年連続の採択となった『続・続・続・続（ゾク・ゾク・ゾク・ゾク）』展は、新たな会場と参加アーティストを加えてさらなる盛り上がりを見せました。また初の映画制作として採択された『笑点街』では、佐竹商店街を中心に台東区の至る所で撮影を実施。商店街の方々にもゲスト出演していただき、台東区の土地の魅力や、活動場所を分散させて地域全体を盛り上げるなどの工夫を感じた年となりました。

Title
お囃子プロジェクト

主催者
お囃子プロジェクト

開催期間【平成22年度】
2010.12.08

開催期間【平成23年度】
2012.02.08—09

会場【平成22/23年度】
浅草KURAWOOD

お囃子音楽の魅力、楽しさを広く伝えていくプロジェクト

『お囃子プロジェクト』とは、お囃子の魅力を一人でも多くの人に伝えたい、共に楽しみたいという熱き思いを胸に発足したプロジェクトです。継承してきた伝統は守りつつも、固定概念にとらわれることなく、自分たちの考える「お囃子音楽」を創り、それをお客さんと共有することをモットーとしています。もともとは五穀豊穣を願うお祭りの場を「囃し立てる・盛り上げる」役割から始まったこの音楽。お囃子の原点に立ち返って、楽しみながら展開しています。日本での伝統芸能のひとつである邦楽囃子の若手演奏家たちが、台東区駒形にあるライブハウスという異色の場所で、多彩なゲストを迎えての公演を2年連続で開催しました。

【開催状況】

2010年度は、まずプレライブを開催しました。望月左太寿郎（小鼓・大鼓・太鼓ほか）、望月秀幸（小鼓・大鼓・太鼓ほか）、堅田喜三郎（小鼓・大鼓・太鼓ほか）、藤舎推峰（笛）の4名の若手演奏家が、伝統的な舞台衣装に身を包みお囃子の演奏を披露。舞台上のスクリーンには、音楽に合わせたシーンを次々に映し出しました。また祭り囃子・能楽囃子・歌舞伎囃子の3つのお囃子の特徴を紹介するテロップも流し、お囃子とは何か・どんな楽器があるのかを紹介。プレライブの後半では、「お囃子大解剖」と題した、楽器体験コーナーを設け、鼓・笛など普段あまり見ることがない楽器を実際に触れてもらいました。そして本編ライブとなった第1部公演では、邦楽囃子の演奏家が楽曲を披露。第2部では、楽器は違えど、同じ「囃す」ことに懸けている、ニトロクン（ジャンベ・ヴォーカル）、カントククン（映像制作）、ダイナクン（ドラム）の3組の個性豊かなゲストを迎え、公演とお囃子とのセッションを行いました。ライブハウスでのお囃子公演、伝統音楽と現代音楽との融合という新しい試みは、盛況のうちに終えることが出来ました。2011年度はプロジェクトの第2弾として、義太夫・サックス・チューバ・アコーディオンなど出演者・ゲストの数を増やし、バージョンアップした内容でお届けしました。第1部では、「お囃子」とは何か、どんな楽器があるのかといった基本的な内容を出演者による「お囃子講座」の映像で紹介。映像を投影していたスクリーンが上がると、伝統的な舞台衣装を身に纏った出演者が登場し、ゲストの義太夫とお囃子出演者6名が、古典囃子の演奏を披露。出演者のバックには、「お囃子」をイメージして制作された映像が花を添えました。第2部では、ゲストのサックス・チューバ・アコーディオン奏者による演奏からスタート。最後はお囃子とゲストバンドとのセッションに映像が加わり、会場内は「OHAYASHI」で大騒ぎ。公演終了後は、観客と出演者による三本締めでお開きとなりました。

23年度ライブの様子

企画者からのコメント

支援制度は、アドバイザーから自分たちのジャンルとは違った角度の意見を聞くことができるので、普通の支援制度と違いとても有意義な物だと思いました。この支援制度でいただいた助言を生かしながら自分達の邦楽囃子というジャンルを広めるためのお囃子プロジェクトは、先日第11回を数えるまでになりました。個人個人でも色々なジャンルの方ともやらせていただける様になり、はじめのこの支援制度での一歩がとても大きな物となりました。

平成22年度チラシ

平成23年度チラシ

ASAKUSA KURAWOOD
浅草KURAWOOD

Title
BOYCOTT RHYTHM MACHINE VERSUS LIVE 2010

主催者
清宮 陵一

開催期間
2010.12.12

会場
国立科学博物館

国立科学博物館

現代音楽やダンスの分野で活躍する最先端アーティストによる「対戦型即興演奏」

アーティスト同士が自らの肉体を駆使して音と音とでぶつかり合う「対戦型即興演奏」をテーマにしたプロジェクト『BOYCOTT RHYTHM MACHINE VERSUS』を2004年から展開。2006年に制作し、各方面から激賛を集めた音楽ドキュメンタリーDVD『BOYCOT RHYTHM MACHINE Ⅱ VERSUS』のライブ・ヴァージョンとして、現代音楽やダンスの分野で活躍する最先端のアーティスト同士による3つのVERSUS（対戦）をお送りするライブを開催しました。

【開催状況】

会場は、閉館後の国立科学博物館。様々な生き物たちの標本や恐竜などの骨格標本に囲まれた展示スペースでの開催は、この場所ならではのプレミアムな空間の演出となりました。第1戦の「AFRA VS Open Real Ensemble B.R.M set」は、ボイスパーカッションとオープンリールを使った音楽によるパフォーマンスでした。AFRAは、2004年にFUJI XEROXのCMで一躍お茶の間の話題をさらったヒューマン・ビートボクサー。映画「Scratch」に出演を果たし、HIPHOP界のマスターピースRUN DMC「My Adidas」を本人たちと競演するなど本場でも活躍し続ける、日本のヒューマン・ビートボックス界のパイオニア的存在です。そしてOpen Real Ensemble B.R.Mは、旧式のオープンリール式磁気録音機を現代のコンピュータとドッキングさせ、「楽器」として演奏するグループ。2009年より和田永を中心とした現役大学生である佐藤公俊、吉田悠、難波卓巳、吉田匡が集まり活動を開始しました。続いて第2戦の「ASA-CHANG VS 康本雅子」は音楽とダンスパフォーマンス。ASA-CHANGはヘアメイクアップ・アーティストとしてキャリアをスタートさせ、1989年に東京スカパラダイスオーケストラのパーカッション兼バンド・マスターとしてデビューしました。自ら創始したその“スカパラ”がブレイクしましたが、1993年に脱退。音楽家（ex.美粧家）だからこそ出来うる、舞台芸術の既存の枠組みにとらわれない自由な発想で精力的に活動しています。そして康本雅子はダンサー兼振付家。これまでに日本国内とイタリア、韓国、マレーシア、タイ、インドネシア、NY、スペインにて公演を行った経験があります。また公演のみならず、演劇、音楽、映像、ファッション界等、多岐に渡るジャンルにおいて活動中です。第3戦の「渋谷慶一郎 VS DJ BAKU」は電子音楽とターンテーブル・ヒップポップ音楽。渋谷慶一郎は東京芸術大学を卒業し、2002年に国内外の先鋭的な電子音響作品をリリースする音楽レーベルATAKを設立しました。また、複雑系研究者／東京大学教授・池上高志と音楽／科学を横断する共同作業を継続的に展開するなど、多方面で活動しています。DJ BAKUはDJ／プロデューサー。HIPHOPを基盤にしながらもターンテーブルを操り常に新しいダンスミュージックを提案しています。2009年にはILL-BOSSTINO・Shing02ら日本を代表するラッパー12人を擁した「THE 12JAPS」をリリースしました。

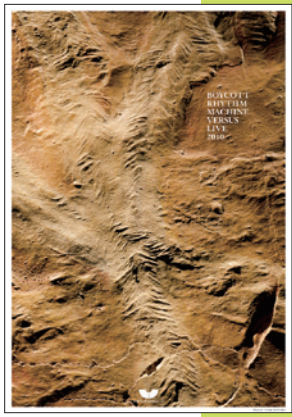
公演の様子

企画者からのコメント

国立科学博物館の利用に際して、支援制度を受けたことにより、金銭面および信頼性の面でプラスになりました。同シリーズは現在も続いていて、2012年には後楽園ホールにて、坂本龍一vs大友良英、いとうせいこうvsShing02等を実施、満員となる1500名の観客を集めることに成功。2016年には海外版として、スガダイローvs JASON MORANをニューヨークスタインウェイ工場にて実施しています。

公演の様子

公演の様子



チラシ

Title
佐竹商店街ショートムービー制作
「笑点街」上映会

主催者
吉岡 篤史

開催期間
2011.02.26

会場
佐竹商店街お休み処

佐竹商店街お休み処

「笑点街」―笑いがつながり街になる―

台東区の歴史ある「佐竹商店街」を舞台に繰り広げられる地域密着型のショートドラマを制作しました。きっかけは、ありのままの町並みを映し出し、さらに異なる表情を発信したいと思ったことです。タイトルは、笑う点の街と書いて『笑点街』。タイトルの通り「笑顔」が街に溢れるような映画を目指し制作しました。『笑点街』は、一人前の商店主を目指す青年の物語で、住み込みで修業することになった丁稚奉公（小僧）の淡い恋模様が描かれた作品となっています。そしてその『笑点街』とは、現実（商店街）と非現実（映画）の間にある街のこと。様々な仕組みとイメージに縛られている現実社会においては、人やモノ、場所の可能性は、まだまだ押さえ込まれているように感じられます。この『笑点街』を通して二つの世界が交わっていくとき、未来への新しい可能性を呼び覚ますことができるのではないかと思いました。制作にあたり、商店街の人々と交流しながらプログラムしていったシナリオ、ありのままの商店街を意識したロケーションハンティングなど、商店街という場所にとにかくこだわりました。ショートムービーが完成したあとは、作品の舞台となった佐竹商店街で、上映会と映画で使用した衣装・脚本等の展示会を開催しました。

【開催状況】

映画の舞台である佐竹商店街は、春日通りから清洲橋通りに至る全長330m。日本で二番目に古い全蓋式アーケードの商店街といわれています。「笑いがつながり街になる」をテーマに、実際に制作メンバーで商店街へ数ヶ月通い、人とのつながりを大事にすることを心掛けました。そうした中での映画制作は、佐竹商店街を中心に、近くの秋葉神社・竹町公園などで撮影を行いました。商店街の方々には、撮影スペースの提供や撮影で使用する小道具など、様々な場面でご協力いただきました。また撮影では、俳優だけでなく商店街の方や実際に台東区に住む一般の方にも出演してもらえないかと依頼。とにかく地域密着型のショートムービーにしたいという想いを胸に、撮影を進めました。そしてショートムービー完成後は、台東区の方々のご厚意により、商店街内にある事務所兼お休み処を会場に上映会を開催することができました。会場の外には、映画の制作情報を随時お知らせするために使用し、プロジェクト開始時の夏からずっと共に歩んできた掲示板を設置。また会場内では、今回の上映会に協賛いただいた方々からお菓子やお茶の提供があり、来場されたお客様と一緒に楽しみました。そして会場の壁面には、映画の中で使用したポスターや衣装・絵コンテ・脚本を掲示するほか、劇中に主人公が読んでいたバイト情報誌や佐竹商店街の店主の椅子を撮影した「王様の椅子」の写真もあわせて展示しました。映画制作の段階から上映会まで、非常に有意義な時間を台東区の方々とともに過ごすことができました。

上映会の様子

企画者からのコメント

文化支援制度のおかげでたくさんの人に出会うことができ、非常に良い経験が出来ました。街の皆さま、アドバイザーの皆さま、そして台東区の職員の皆さまには、大変お世話になり感謝しております。またいつかあの商店街にお邪魔して、台東区で活動できればと思っております。本当にありがとうございました。

商店街設置掲示板

ポスター

メンバー